日本ハーディ協会第65回大会

日時 2022年10月29日 (土) 10:25~18:00

場所 名古屋大学 東山キャンパス 文系総合館7階カンファレンス・ホール

〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

電話 052-789-5111 (代表) 大学HP: https://www.nagoya-u.ac.jp/

日本ハーディ協会庶務委員長

開会の辞 (10:25) 総合司会 国士舘大学教授 今村 紅子

研究発表 (10:30~11:45) 司会 大阪成蹊短期大学講師 麻畠 徳子

『日蔭者ジュード』(1895)と家庭愛の誕生 東北学院大学大学院博士前期課程 丹野 海晴 一新たな家族意識の形成をめぐって

2 ハーディ作品におけるジプシーの表象 京都大学非常勤講師 永盛 明美

— "The Sacrilege: A Ballad-Tragedy"を中心に

研究発表 (11:55~12:30) 司会 名古屋学院大学教授 西村 美保

一テスの死の意味

昼食休憩 (12:30~13:30) 日本ハーディ協会事務局長

総会 (13:30~14:00) 司会 近畿大学准教授 高橋 路子

○役員改選 ○会計報告 ○編集委員会報告(会報・協会ニュース)○次期大会について ○その他

シンポジウム (14:10~16:20)

ハーディと進化論―実りある研究にむけて

司会・講師 元茨城キリスト教大学教授 清宮 倫子

講師釧路公立大学教授藤田 祐講師日本女子大学教授Neil Addison

特別講演 (16:30~17:50) 司会 東京都立大学教授 **亀**澤 美由紀

世紀末のコテッジと農村共同体

―トマス・ハーディ小説における建築表象

講師 東京大学教授 大石 和欣

閉会の辞 (18:00) 日本ハーディ協会会長・西南学院大学教授 金子 幸男

懇親会 開催しません

※ 受付は10時から開始します。例年と違い、受付では会費徴収を行いません。協会会費未納の方は、4,000円(学生会費1,000円)を別途納入してください。維持会費(寄付)は一口1,000円です。ご協力をお願いいたします。

※ 昼食は、休憩室兼控室 (3階308-309教室) で取ることも可能ですが、静食を心がけてください。また、大学近隣 の飲食店も利用できます。なお、休憩室兼控室では、茶菓の準備はいたしておりませんので、飲み物等は各自で ご用意ください。

※ 新型コロナウイルス感染症の拡大状況によっては、リモート開催に変更させていただく場合もございます。

※ 大会への出欠確認については、別途ご案内いたします。非会員で当日参加希望の方は、あらかじめ事務局までご 連絡ください。

※ 当日は、感染対策にも万全を期し、密にならないよう十分に広い会場で行いますが、参加者の皆様には必ずマスクの着用をお願いいたします。発熱や咳、倦怠感などの症状がある場合は参加をお控えください。

問い合わせ先: 日本ハーディ協会事務局

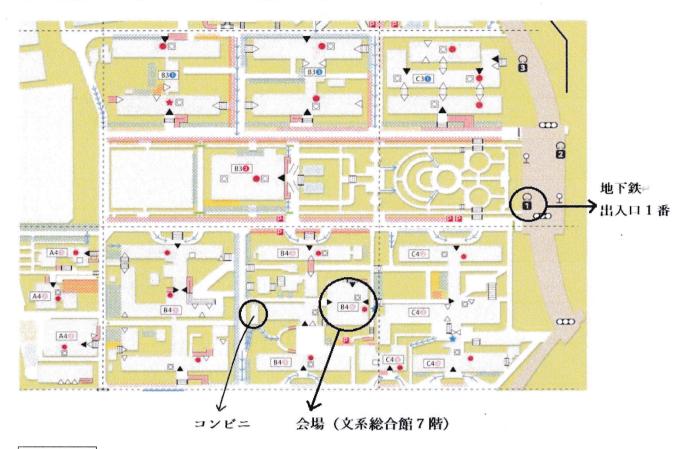
〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3丁目4-1 近畿大学経営学部 高橋路子研究室内

メールアドレス: jimu.thsjapan@gmail.com

主催 日本ハーディ協会 後援 名古屋大学大学院人文学研究科

日本ハーディ協会第 65 回大会会場

場所:名古屋大学 東山キャンパス 文系総合館7階カンファレンス・ホール



昼食について

- *会場の近くにコンビニがあります。
- *休憩室兼控室(3階308-309教室)で、お弁当を食べることができます。
- *地下鉄駅1番の信号を渡って斜向かいの建物 1 階に山手カフェ (定食屋)、2 階に香蘭楼 (台湾料理) があります。

交通アクセス

東山キャンパス

地下鉄名城線名古屋大学駅下車すぐ



《研究発表概要》

1. 『日蔭者ジュード』(1895) と家庭愛の誕生——新たな家族意識の形成をめぐって

丹野 海晴

ハーディの最後の長編小説である『日蔭者ジュード』(1895) に家庭愛で結ばれた家族は登場しない。このことの要因を考えてみるとき、ウェセックスに散在する地方都市や農村という共同体の存在は極めて大きいものと言えるだろう。物語世界の農村共同体が崩壊しつつある状態であることはしばしば指摘されるとおりである。しかし、そのような窮状にあっても、ウェセックスの人々の生活基盤は依然として農村共同体にあったと思われる。というのも、当該小説にはハーディが批判の対象とした因襲が多分に描かれており、これに盲従する人々の行動様式は共同体の団結を前提とするものだと考えられるからだ。そのような伝統的価値体系に疑義の念を抱き、個人の幸福を願うジュードとスーは、共同体の永続性を志向する法による結婚から逸脱するがゆえに、いずれの共同体にも根を下ろすことができない。

本発表では『日蔭者ジュード』に描かれる共同体と家族の関係を分析する。因襲に囚われたウェセックスの人々の家族が共同体の利益を第一とした冷淡な家族関係にあるのに対し、ジュードとスーのいわゆる自然結婚は共同体の利益よりむしろ個人の幸福を前提とする家庭愛で結ばれていることを例証する。家庭愛という抽象的な観念に言及するにあたり、『ジュード』研究でしばしば問題とされる「共感性」にも目を向ける。最終的にこの小説を、農村共同体の形骸化に伴い出現した、家庭愛を基盤とする「核家族」という新たな共同体の形成を描いた物語として読むことがねらいである。

2. 「ハーディ作品におけるジプシーの表象: "The Sacrilege: A Ballad-Tragedy"を中心に」

永盛 明美

"The Sacrilege: A Ballad-Tragedy"は、Fortnightly Review に 1911 年 11 月に掲載され、その後幾度かの改訂を経て、第 4 詩集 Satires of Circumstance (1914) に所収された、Thomas Hardy (1840-1928) によるバラッドである。本詩作品の特徴は、物語の内容もさることながら、登場人物が全てジプシーと想定される点にある。ジプシーは、Hardy の住まうイングランドのみならず世界各国の様々な環境を長い歴史の中で渡り歩き、人々の関心、殊に、ネガティヴな印象を持たれることの多かった流浪の民である。それゆえに、描かれる際はステレオタイプ化されたジプシー像として提出されることも少なくない。本発表では、作品中に描かれる流浪の民ジプシーの男性、女性の造形に分析を加え、読み解くことで、"The Sacrilege"の意義を見直したい。

詩人 Hardy は、"The Sacrilege"において、ステレオタイプ化されたジプシー像を超えて、彼らの中にもあるはずの、人間の狂気、憎悪、怨念、絆を、ジプシーの民族性や風習に根差して描きだしている。そこには、社会、文化という枠組みの中で、周縁に生きる人々へ向けられた詩人の眼差しと、古き伝承を 20 世紀へと継承する詩人の姿勢があるのである。

なお、現在では「ジプシー」という呼称は差別的表現とされているが、本発表においては 19世紀当時の彼らの実像、あるいは虚像に迫るため、あえて「ジプシー」という表現を用いることをお許しいただきたい。

3. 『青い瞳』から『ダーバヴィル家のテス』へ―テスの死の意味

辻 建一

『青い瞳』と『ダーバヴィル家のテス』のそれぞれの男性キャラクター、ヘンリー・ナイトとエンジェル・クレアの類似性についてはたびたび指摘されてきた。知的で進歩的な考えの持ち主であり女性に対して純潔を強く求める二人は、それぞれエルフレードとテスに穢れのない女性像を期待しながら、自分の理想と違っていたことを知ったとき大きな失望を示し女性から離れていってしまう。またそれに対する女性側の反応にも類似性が見られる。それ以外にも『青い瞳』と『ダーバヴィル家のテス』には奇妙なほど共通点が多く、それぞれの出版年が1873年(『青い瞳』)と、1891年(『ダーバヴィル家のテス』)と、かなり離れているだけに、この二作品に重なる部分が極めて多いことは興味深い。

しかし、『ダーバヴィル家のテス』の方のみに見られる要素もいくつか指摘できる。例えばクレアはテスの古い家柄にこだわりを持ち、それに対して歴史ロマンと生物学的衰退という両義的な見解を示している。また、女主人公の遺伝による行動の反復については両作品で言及されているが、『ダーバヴィル家のテス』においては遺伝とは別に人間の普遍的な振る舞いの反復というコンセプトが出てくる。さらに、テスの死には古代の儀式の生贄との重なりという意味合いが付与されている。このようにこの二作品の共通点と相違点を分析することで、ハーディが小説家としてより成熟していったときに変容した部分を見極め、その変化の理由を探っていく。

《シンポジウム概要》

ハーディと進化論 ---実りある研究にむけて---

はじめに

清宮 倫子

進化論とはなんぞや?と問われて、すぐ答を出せる人はおそらく皆無に近いであろう。英語でいえば、progress とか evolution となるが、これは Darwin より Herbert Spencer が好んで使った用語で、Darwin は、transformation とか mutation という用語を使った。Hardy は、19歳の時、『種の起源』の出版を「拍手をもって迎えた」と伝記に記しているが、「衝撃を受けた」とは記していないことに注意が必要である。Addison 氏が指摘しているように、この時すでに、様々な「進化論」がヴィクトリア朝文化の根底に存在していたのである。さらに、ドイツやフランスやアメリカにも浸透していたことが知られている。

今日、「進化論」を Darwin が代表しているのは、20世紀に入ってから自然科学、特に分子生物学の急激な発達により、彼の「進化論」の「自然選択」説の価値が証明されたからにほかならない。すなわち、20世紀に入ってからのメンデルの再発見までは、Darwin の進化論は、様々な「進化論」のなかで決して優位をしめてはいなかった。当時、英国で最も影響力のあった進化論者は Darwin ではなく Spencer であった。Spencer は総合的な進化哲学を構築することに腐心したので、「進化論」を科学思想として認知する現代においては、自然科学と人文学の混同あるいは、無理な結合をしたいい加減な思想家として、急速に軽視されるに至った。

しかし、Hardy を文化的文脈において理解しようとする場合、問題にすべきは、当時の「進化論」でなくてはならない。ヴィクトリア朝時代の「進化論」は、確実な成果を約束するきわめて厚みのある豊かな言説である。まず、ここを立脚点にすることが肝要である。

ハーバート・スペンサーの進化社会理論と政治思想

藤田祐

ヴィクトリア時代にイギリスだけでなく世界中で大きな存在感を示したハーバート・スペンサーは、20世紀に入ると急速に影が薄くなり、典型的な社会ダーウィニズムを唱えたという位置づけのみが独り歩きして記憶されることになった。スペンサー思想を「社会ダーウィニズム」と片付けるのは一面的であるが、様々な学問を統合しようとした「総合哲学」は、どのような切り取り方をしても断片的な理解に留まりかねない。本報告では、初期スペンサー思想、多層的な進化理論、『人間対国家』(1884)の政治思想に焦点を合わせてスペンサー思想を理解する鍵を提供したいと考えている。

事実上最初の著書となる『社会静学』(1851)では、人間を社会化する進歩の必然性が強調され、 完全な人間性を想定した理想社会における規範が探究されている。理神論の神に支えられた理想 社会論という初期スペンサーを特徴づける要素に加えて、後期スペンサー思想の萠芽も見られる。 古典的リベラリズムを支える「平等な自由の法」と社会進化論、〈キャラクター〉決定論と社会有 機体論、文明と野蛮の区別と不適者に対する冷酷な態度などである。

その後スペンサーは、『社会静学』の進化理神論を後景に退かせる代わりに、当時最先端の学問で自らの体系を支えようとし、様々な学問を横断する「総合哲学体系」を構築していく。「総合哲学体系」を支える「科学」の中心を占めていたのが進化理論である。ただし、スペンサーの進化理論は、生物進化理論に留まらない複層性をもつ。まず「不明瞭なまとまりのない同質性から区分の明瞭なまとまりをもった異質性へ」という全宇宙を貫く普遍進化の原理があり、次に「社会に適用した生物進化論」と「社会有機体の進化理論」という二つの意味での社会進化論がある。前者の社会進化は、ラマルクとダーウィンの進化メカニズムを通じた環境との相互作用による〈キャラクター〉(性格・品性・形質)の進化であり、後者の社会進化は、社会有機体を構成する要素が特殊化・専門化しながら相互依存を強める過程である。このような二種類の社会進化をマクロな宇宙進化におけるミクロな側面とするのがスペンサーの進化理論である。

1880 年代になるとスペンサーは、第二次グラッドストーン内閣における国家の社会に対する介入策を批判する「個人主義」と呼ばれた潮流を代表する思想家とみなされるようになる。ここでの「個人主義」とは、国家による社会改革を主張する「集団主義」を批判し、個人の自由を最大化するために国家の役割を削減することを主張する思想潮流である。国家と個人を対立させる「個人主義」の考え方は、スペンサーが同時代の自由党政権を批判した論考のタイトルである『人間対国家』に象徴されている。総合雑誌に投稿された四本の論考からなる『人間対国家』は、軍事社会から産業社会へという社会進化論、〈キャラクター〉決定論、公的救貧批判、自然法思想というスペンサー思想を特徴づける要素を根拠にして国家の権限拡大を批判した時事評論である。

以上の三点を鍵にしてスペンサー思想の特質を明らかにしたい。

Hardy and Darwin Among the Poets

Neil Addison

Over the last few decades, since Gillian Beer's Darwin's Plots (1983), Thomas Hardy's fiction has increasingly been discussed in relation to On the Origin of Species (1859) by Charles Darwin. Hardy himself wrote that his work displayed 'harmony of view with Darwin' (Collected Letters: VI 259). His poetic response to Darwin, however, can be fruitfully explicated by placing it in context alongside the body of nineteenth-century verse that reacted to changing evolutionary thought. Robert Chambers' Vestiges of the Natural History of Creation (1844) was a significant text that introduced evolutionary ideas to Victorian public awareness. This drew upon the notion proposed by Jean-Baptiste Lamarck, who argued that organisms changed in order to adapt to their environment, and that those changes were then passed on to further offspring. Alfred Lord Tennyson, in In Memoriam A.H.H. (1850), was cautiously receptive of Vestiges, expressing sentiments that echoed a Lamarckian notion of the great chain of being, imploring Man to 'Move upward, working out the beast, | And let the ape and tiger die' (Canto 118 27-8). Later, the publication of Darwin's Origin (1859) provoked a more pessimistic series of poetic responses to the issues addressed by his theory of natural selection. Ideas discussed in Robert Browning's 'Caliban Upon Setebos' (1864) and Herman Melville's Clarel (1876), for example, can be directly traced to Darwin's theory. In the somewhat uncertain Epilogue of Clarel, Melville asks 'If Luther's day expand to Darwin's year, | Shall that exclude the hope — foreclose the fear?' (1-2).

Hardy's poetry was not Lamarckian, and, although affected by the implications of Darwin's theory, can also be differentiated from such poets who responded to Darwinian ideas. While he read Tennyson and Browning, he was particularly inspired by earlier Romantics such as William Wordsworth, and John Keats. Wordsworth's celebration of ordinary stoicism and perseverance, such as in 'Resolution and Independence' (1807), greatly appealed to Hardy as he faced a harsh and competitive Darwinian world. Further, Keats' 'Fancy' (1820) appeared to influence the ways in

which Hardy's poems display moments of imaginative wonder, even in the face of a secular Darwinian reality. His poetic *oeuvre* thus evidences a number of brighter examples alongside more pessimistic pieces, demonstrating the combined influence of both Darwinian theory and the poetic arts upon his verse.

Hardy's poetic reaction to Darwin's Origin can be separated into several general types. A number of his poems are more directly pessimistic, such as 'The Ivy-Wife' (Wessex Poems 1898), and 'In a Wood' (1898), appearing to show natural competition and degeneration. Other pieces draw upon Darwinian imagery to stress the importance of sympathy and 'loving kindness'. Hardy's 'The Wind Blew Words' (Moments of Vision 1917) references the more negative aspects of Darwin's Origin, but also signposts, along with 'Compassion: An Ode' (Human Shows 1925), the implications of Darwin's theory for animal and human kinship. Elsewhere, several of Hardy's poems imagine a hopeful human and species endurance. In 'Heredity' (1917), the poetic speaker takes the form of a family gene which will endure across the generations despite the death of each individual. The speaker tells us, 'I am the family face; Flesh perishes, I live on,' (1-2). Furthermore, in poems such as 'In Time of "The Breaking of Nations" (1917) and 'Proud Songsters' (Winter Words 1928), life continually revivifies. In the former poem, old ploughmen, horses and country lovers endure as idealised rural forms, while the singing birds in the latter poem are imagined springing almost magically into existence from 'particles of grain, | And earth, and air, and rain.' (11-12). In his brighter poems, Hardy's speaker draws wonder and imaginative hope from life's continual endurance.

ダーウィン『人間の由来』と小説家ハーディの終焉

清宮倫子

Darwin は、『種の起源』出版の12年後に『人間の由来』(1871)を出版した。この書物は『種の起源』で論じられていたあまたの生物を支配する最適者生存の法則が人間にもあてはまり、他の動物と人間が連続していることを論証しようとしたものである。そこで、「性選択」という雌を獲得せんとしてする雄同士の闘争を通して勝った個体は選択され、その性質は遺伝するとし、さらに人間の場合、「美徳」というものを社会的本能として遺伝的性質と認めた。これは、『種の起源』に含意されていた、個体として生き残るためには利己を利他に優先させなくてはならないという、Spencer が主張した議論と齟齬をきたしている。小説家 Hardy が最後にこだわったのはこの点である。

同時代に活躍した Emile Zola も Henry James も同じ文化的文脈にあったが、「美徳」を前面に出して描くことはしなかった。それは作品全体から自然に立ち上がるものであるとした。いわば、「進化論」の対極にあるキリスト教に距離をとったのである。一方、Hardy は、lovingkindness と

いう言葉を頻繁に用いて、キリスト教道徳との接触をはかった。ここにヴィクトリア朝小説家と しての Hardy 文学の特質がある。

以上の観点から、『恋の霊』(The Well-Beloved)を中心に論じて、小説家としての Hardy が筆を折った内的原因をさぐるのを本発表の目的とする。

『恋の霊』は、連載版と一巻本の2版あり、それらが『ジュード』の出版を挟んでいることはよく知られている。連載版では主人公ピアストンは、アヴィシー3世との結婚を果たしながら、彼女が恋人を忘れられないのを見かねて自殺をはかる。ここで扱われている結婚問題は、『ジュード』で再び社会の中における恋愛と結婚として扱われ、王道をいくヴィクトリア朝小説として完成した。ところが Hardy は、その後一巻本として『恋の霊』を著し、「ある気質のスケッチ」と副題をつけて、「ファンタジーあるいはロマンス」として出版し、その中で性欲に焦点をあて、恋愛と結婚を切り離した。

Darwin の「進化論」は生き残る者を特定する議論である。生物として生き残るとは再生産を果たす、すなわち性交により子を得るということである。そのためには性欲という遺伝的形質が最も重要である。「欲情をそそる」、「性的に露骨」などの理由で、主な出版社から『テス』の出版を断られて苦難を強いられてもなお、性愛の追究に突き進んだ Hardy は、一方でキリスト教道徳すなわち「黄金律」への執着も捨てられなかった。性愛の追究は、結婚のなかに性を隠蔽してきたヴィクトリア朝小説そのものの成立を困難にしている。ここに小説家としての Hardy のジレンマがあるとして、彼の小説の断筆の内的動機を探る。

《特別講演概要》

世紀末のコテッジと農村共同体
- トマス・ハーディ小説における建築表象

大 石 和 欣

建築家としての専門的訓練を受け、優れた才能も備えていたトマス・ハーディの小説には、さまざまな建築物が描かれている。『日陰者ジュード』におけるクライストミンスターの建築群やジュードが補修する地方の中世教会は好例であろう。後年「古建築物保存協会」にも所属することになったハーディは機能性を持ったゴシック様式を評価する傾向があり、そうした趣味は小説のあちこちに表出している。対照的に『ダーバヴィル家のテス』における成金者アレック・ダーバヴィルの実家や愛妾としたテスとともに住む家は、モダンな様式として描いている。

しかしながら、ハーディの小説群において頻出しかつ最重要な建築物は、ごく平凡で日常的なコテッジではないだろうか。農業に従事する人びとやジュードのような職人が、日々の労働からの避難地として朝夜を過ごし、生活の瑣末事に追われ、家庭内の喜びと同時に悩みを抱え、時に軋轢と亀裂さえ経験するトポスがコテッジである。建築様式としては単純な構造であるコテッジは、建築史においても注目されることがなく、ハーディの建築に関する知識や技術に着目する研

究でも看過されがちである。だが、農村共同体の根幹を支える単位としての家族や個人を規定し、 存立させる空間としてコテッジは無視できない。時にはコテッジが村落共同体の命運を象徴する 場合もある。とりわけ 19 世紀末のイギリス農業は、地域差はありながらも自由貿易を通した安価 な米国産の肉や穀物の輸入により多大な影響を被り、疲弊と衰退の途にあった。その中にあって 農村共同体はそれまで以上に流動的になり、結果としてコテッジもまた住人が入れ替わったり、 補修を施され、時には解体さえも経ていった。

本講演では、ハーディのそうしたコテッジ表象を、『ロングマン・マガジン』に寄稿した「ドーセット州の労働者」を参照しながら、同時代におけるコテッジの歴史的状況に照らし合わせながら考察していく。まず初期の小説である『はるか群衆を離れて』や『帰郷』に描かれているコテッジや農家屋を、実存的な意味を備えつつもナイーヴな建築空間表象として読み解く。その上で後期の小説、とりわけ『ダーバヴィル家のテス』において、コテッジが単に実存的なだけではなく、農村共同体自体の変容や衰退をも示唆し、さらにはハーディの思想そのものを反映する空間として表象されていることを示したい。ハーディが同時代の思想と呼応しているのであれば、フランスの社会学者ピエール・ブルデューが社会制度を通して構造化されていく文化的産物を呼称した「ハビトゥス」の一例として、ハーディのコテッジ表象を捉えることもできる。つまり、ハーディ小説に描かれたコテッジは、「牧歌」あるいはレイモンド・ウィリアムズの言う「反牧歌」の象徴であるだけではなく、イギリス 19 世紀末思想の中で胚胎された建築空間ということになりえる。